

中世 日田の武士団と村落

長 順一郎

◇はじめに

豊後国日田は江戸期、幕府直轄領西国筋郡代が置かれたので、日田には土族がいまいとされた。戦前少数いた土族は、隣の黒田藩、細川藩、久留島藩等の関係者であった。

しかし江戸期以前、郡司職大蔵氏治下の頃、数々の戦乱に華々しい活躍の名を残した武士団がいた。文永の役では大蔵永基の下に三百余の日田勢が、筑前姪浜や百路原で戦い、大友の英彦山攻め、北九州出兵では常にその先鋒を務めた。

秀吉朝鮮出兵文禄の役では、その出征名簿の「豊後国諸侍着到」から武士団の名前と一その前の天正十七年の太閤検地の記録が残っている。貴重な歴史資料である。またその武士団の村落拠点が見出される。居館、城、氏寺跡の石垣、塔、水路、地名など佛像が残っている処もある。

これらを検証しながら、往年の残照を求めたい。

◇武士団の面々

「豊後国諸侍着到」(永禄の役の出征名簿)に出る人名を主とし、天正十七巳丑年十月日田郡検地調符を重ね、同一人物の氏

名と所領を主とし、尚検地帳のみに出る氏名も記した。検地帳にはあり、文禄の役には出ていない者がいる。老令か病弱で外征に従えない者もいたのであろう。

坂本因幡守は田畠合廿五町余で現在石井村字寺内に居住跡が残り、その次男の坂本彦右衛門尉は出征し、両文書に出ている。その居住地は石井村津辻でその地に墓も残っている。

○印は大蔵和市氏(昭和二十八年没五十三歳)の註記で、筆者がその半数を検証し、信憑性の高いものである。◎は筆者所領の少ない者で出征した者が多い。この頃は報奨を目当てに戦場に出る者もいたのである。参考記事も入れた。これらの人名の中、居住地の判明している者もいる。

◇武士団の面々

坂本備中入道

田地 百三十九町五反八畝九歩

畠地屋敷百一町九反八畝十七歩

田畠合 百七十六町九反

畠地三反引而如斬

○城址は西有田字坂本原にあり、原城と云ふ大手堀切等の址残り。前城を笹尾城と云ふ毘沙門天堂の後山なり。纔に石垣残る。

○造領記に東有田羽田山神社の棟札に、文明十九天歳次丁未云々大蔵氏伯耆守繁義敬白と見ゆ、この繁義坂本氏の祖なるべし。後の伯耆守其の孫なり。

○備中守名は、鑑次、墓は城地の西方数町にあり。銘に云ふ天譽随鵬居士、天正十年十一月□日、今此所をズヨードンといふ。

坂本勘八

田坂 廿四町二反六畝十五歩

畠地屋敷 三十六町七反五畝十八歩

田畠合 三十六町五反十五歩

右同断

坂本彦右衛門尉

田 畠 十六町

○因幡頭の二男なり。名は吉次法名譽浄欣石井村津辻に墓あり。

坂本大膳亮

田 畠 九町四反

坂本藤内允

田地 七町七反七畝廿九歩

畠地屋敷 五町九反三畝九歩

田畠合 九町七反七畝廿一歩

右同断

坂本五郎兵衛尉

坂本主税助

坂本作進

坂本進士允

坂本四郎山衛門尉

坂本平左衛門尉

坂本藤紀允

坂本膳内允

坂本次郎左衛門入道

坂本刑部丞

坂本紀右衛門尉

坂本式部少輔

坂本市右衛門尉

坂本内右衛門尉

佐藤山城守

田 島 三十九町六反

○城地は小野村上小竹にあり、今城山といふ。

○佐藤系図曰 山城守前出雲守永信後鎮信、日田郡老八奉行之例となり、中城之枝城小野小竹之要害云々 天正十七年八月

十七日卒

佐藤四郎右衛門尉

田 島 十町九反

○佐藤四郎右衛門長活、寛永十六巳卯年三月十六日卒。

佐藤縫殿介

田 畠 六町一反

佐藤主膳允

羽野新助一(太郎兵衛尉)

田 畠 四十六町三反

○城地は三花字羽野の山上にあり。今城の辻と云ふ。○財津系図に永豊(永清二男)五郎、居于羽野壘故以羽野爲氏、

羽野理右衛門尉

田 畠 八町六反三畝

羽野彈助

田 畠 四町三反四畝

羽野左京亮

田 畠 三町一反七畝

師富孫右衛門尉

田 地 三十三町三反一畝廿八歩

畠地屋敷 十六町四反五畝廿六歩

田 畠 合 三十八町七反九畝廿五歩

右同断

高瀬下野守

田 畠 四十町九畝

○高瀬系図 永時

高瀬勘允一(勘之丞)

田 地 六町三反七畝

畠 地 屋敷 三町六反七畝三步

田 畠 合 七町五反九畝十一歩

右同断

高瀬次郎右衛門尉

田 畠 五町五反

高瀬治右衛門尉一(孫次郎)

田 畠 四町五反

高瀬新右衛門尉(主膳入道)

田 畠 一町七反八歩

堤三右衛門尉一(玄衛門尉)

田 畠 二十五町

○城地は上城内字堤の東にあり。石垣馬場勢溜の址残り。

堤式部丞

田 畠 十七町五畝

堤石見入道

田 畠 二町一反

堤五郎右衛門尉

堤九左衛門

堤三橋允

堤三郎左衛門尉

小野民部丞

田 畠 九町四反

小野六郎太郎

田 畠 二町二反

堀宮内允

田 地 十一町三反九畝十九歩

畠地屋敷十一町一反七畝廿歩

田畠合 十五町一反二畝九歩

右同断

○広円寺藏鰐口の銘に掘下野守とあるのは此族なるべし。

今井久佐衛門尉

田 畠二町二反

今井佐馬助

田 地 十八町六畝廿九步

畠地屋敷十二町一反六畝八步

田畠合 廿二町一反二畝二步

右同断

世戸口舍人允

世戸口忠七右衛門尉

世戸口民部丞

世戸口新左衛門尉

世戸口相右衛門尉

石松喜左衛門尉(一忠十郎)

田 畠 六十二町

○城地は西有田字石松にあり、今畑となる。字を城といふ。大手堀切等の址あきらかなり。石松系図日廉正肥前守石松邑賜菜地由之爲姓、天文十五年在丙年日田爲縣令。

◇石松姓のうち検地帳のみに出ているものを参考に託す

石松玄蕃允

田 島十七町四反

石松掃門助

田 島十町六反

石松主税助

田 島四町一反

石松加右衛門尉

田 島三町七反

石松治助

田 島三町四反

石松左近允

田 島二町

○石松系図 鎮正号太郎右衛門、廉正子。

○永号左近允屋輔址石松にあり。

石松調右衛門尉

田 島一町

上野六郎衛門尉

田 畠六町六反

上野忠次郎

田 畠一町八反

財津大学允

田 地 八十四町四反十五步

畠地屋敷六十一町七反三畝十四步

田畠合 百二町九反七畝十五步

畠地三反引而如斯

○城域は藤山に在り。今城野と云ふ。長門守二人あり、父を永満、子を鑑永と云ふ。

○財津系図 永高任大学助云々、法名然譽自安禪定門。

文祿の役従軍者

財津又太郎 財津九左衛門尉

田 畠 三十一町三反一畝九步

財津三七郎 財津船左衛門尉

田 畠 六町二反六畝

財津六郎 財津甚九郎

田 畠 七町六反

財津博右衛門尉 財津橘左衛門尉

田 畠 七町八反九畝廿步

財津孫三郎 財津七右衛門尉

田 畠 十三町

財津主税入道 財津四郎右衛門尉

田 畠 □□

財津覺右衛門尉——財津寛右衛門尉

田 畠 □□

財津主殿助 財津与五郎

田 畠 四町二反三畝二十一步

財津帶刀允 財津千松

田 畠 □□

財津平右衛門尉——財津平右衛門尉

田 畠 五町一反八畝

○財津系図 名は永道

財津左衛門尉 財津助左衛門尉

田 畠 三町八反八畝

財津七右衛門尉 財津作進

田 畠 九反

鍛冶屋右近允

田 畠 一町四反

鍛冶屋右京亮

田 畠 一町四反

鍛冶屋右馬助〔文祿の役 名前なし〕

田 畠 十七町八反二畝十一歩

鍛冶屋治部丞〔同前〕

田 畠 一町五反九畝

山部玄番入道

田 畠 五町六反

山部長右衛門尉

田 畠 二十一町八反

検地帳に名前のある者

山部辯才

田 畠 九反五歩

星野権介

刃連紀右衛門尉

田 畠 □□

刃連右馬允

刃連弥次右衛門尉

刃連左馬助 (檢地帳のみ)

田 畠 九町七反二十歩

新原兵部丞 兵部少輔

田 地 十一町九反一畝一歩

畠地屋敷 十四町四反六畝三歩

田畠合 十六町七反三畝三歩

右同断

○新原に墓あり。

○豊西説話に、新原は新原兵部少輔一門の屋敷址なりと、今なほ此地に掘々木戸等の名残れり。

新原主税助

田 畠 四反六畝

新原彈正忠

田 畠 六町六反

新原堅介

新原六郎右衛門尉

新原治部丞

新原市右衛門尉(檢地帳のみ)

田 島 七反三畝廿歩

平嶋刑部丞

田 島 十九町

◎諸留村に居住す。豊西記に種々記事あり。

平嶋内右衛門尉

鬼武右京亮

田 島 一町九反一畝

鬼武甚左衛門尉

鬼武助七郎

田 島 四反六畝二十歩

鬼武造酒允

田 島 十二町六反

○屋輔址と伝ふる所下井出にあり、今地名を鬼武といふ。

津江新左衛門尉

田 地 廿二町五反二畝六歩

島地屋敷廿九町四反廿九歩

田島合 三十二町三反二畝十五歩

右同断

り。
○豊西説話に吉統云々新左衛門、明暦二丙申年三月十二日卒法名宗善とあるは此新左衛門ならんと。墓は大山村小切畑にあ

た。
◎この津江姓は本来「長谷部」で、能登半島から源平時代に津江の地に來り、その土地の名、津江姓と、長谷部姓に分かれ

津江掃部助

津江総次郎

津江刑部太輔

以上文祿の役従軍

津江作之進

田 島 四反九畝十歩

津江攝津守

田 島 一町一反八畝

羽田弥左衛門尉

羽田彌三右衛門尉

田 島 四町五反

相良平内允

岡部又兵衛尉

岡部攝津入道

田 島 十一町七反

寶珠山織部丞

田 島 四町一反

寶珠山又在衛門尉

寶珠山六進(六之進)

田 島 九反七畝

帆足全助

田 島 六町五反

赤尾兵庫介

田地 十八町五反七畝十八步

畠地屋敷 十五町四反三畝五步

田畠合 廿三町七反一畝廿九步

右同断

○屋輔址才田にあり。今国民学校の地。

平河内藏助

平川彌助

田 畠 五反一畝

平川玄内允

田地 十二町四畝廿一步

畠地屋敷五町四反九畝廿步

田畠合 十三町八反七畝廿七步

右同断

賀来市右衛門尉

武内五郎兵衛尉

田 地 十四町三畝十九步

島地屋敷十四町四反二畝十六步

田 島合十七町五反二十步

右同断

○武内氏屋敷は友田村上屋敷と云ふ。

三侯刑部丞

田 島 一町八反

○姓阿蘇堀田村三侯に貫す。地名にて呼ぶ。

瀧下紀伊介

田 島 二町五反六畝

○瀧下系図 西有田札町に貫す。

瀧下忠五郎

田 島 五反八畝二十步

二串源四郎

田 島 一反七畝十八步

二串又左衛門尉

田 島 四反三畝廿步

○二串に貫せししよつて此名あるべし。

○竹田津系図考に日田郡に小串の地名を今不聞といふ、二串村あり、古老の説に昔大串小串あり、後今一村となりて二串と称すならん云々。

矢野小次郎

田 島 八反七畝十五歩

池部織部丞

田 島 二反九畝

中嶋永薩

田 島 二町

麦生兵部丞

田 島 一町一畝

賀來右近允

田 島 五反三畝

賀來一右衛門尉

田 畠 一町四反

養父勘四郎

田 畠 九反

荒川忠三郎

田 畠 六反二畝

北里彌七郎

田 畠 二町六反

奈良原孫十郎

田 畠 □□

検地帳から

(参考にそのママ記す)

河邊九郎左衛門尉

ママ
町屋敷 五ヶ所半

長嶋土佐守

町屋敷 五ヶ所半

夜開郷司 田島 九反五畝

日理郷司 田島 九反一畝

日田の八郡卷

坂本伯耆守鑑次 日田家ヨリ出タルトモ、

○其始ヲ詳ニセズ、壘ハ坂本村ノ山中、原城土壘アリ。

財津長門守鑑永 日田三郎永息ノ二男永清

ヲ祖トス。壘ハ藤山村ヲ内藤山ト云在リ。羽野遠江守鑑房 財津永清カ二男五郎永豊ヲ祖トス。壘ハ羽野村ノ後山ニ在リ。

石松肥前守鑑正 日田六郎永資ノ二男五郎永徳ヲ祖トス。壘ハ石松村蕪ニ在リ。壘アリ。堤越前守鑑智 日田氏ヨリ出タルト

モ今不詳。壘ハ堤村ノ東、原山ノ後ニ在シナリ。

高瀬山城守鑑俊 上古ヨリ日田家臣也。壘ハ北高瀬村ノ垂水ト德行ノ上、天満宮ノ辺。

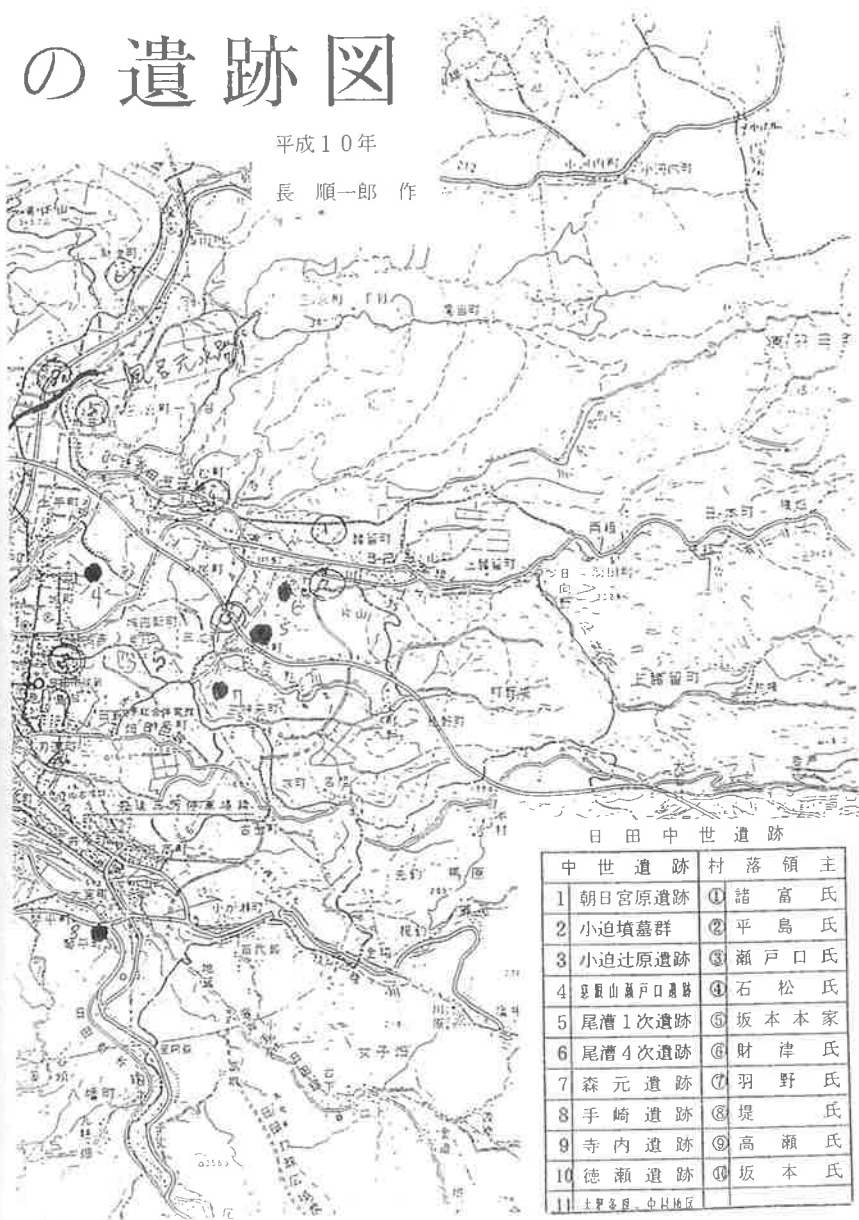
佐藤出雲守永信 津江長谷部家ノ臣、後主家滅テ日田家ニ仕ヘシカ、一日田家亡シ後、郡務八人ニ選レタリ。壘ハ小竹村ニ在リ。

世戸口大和守永益 日田家ヨリ出タルトモ不詳。壘ハ西池部ニ在シナリ。

の遺跡図

平成10年

長 順一郎 作



日田中世遺跡

中世遺跡	村落領主
1 朝日宮原遺跡	① 諸富氏
2 小迫墳墓群	② 平島氏
3 小迫辻原遺跡	③ 瀬戸口氏
4 翠巖山瀬戸口遺跡	④ 石松氏
5 尾漕1次遺跡	⑤ 坂本家
6 尾漕4次遺跡	⑥ 財津氏
7 森元遺跡	⑦ 羽野氏
8 手崎遺跡	⑧ 堤氏
9 寺内遺跡	⑨ 高瀬氏
10 徳瀬遺跡	⑩ 坂本氏
11 日田各町・中世地区	

日田中世

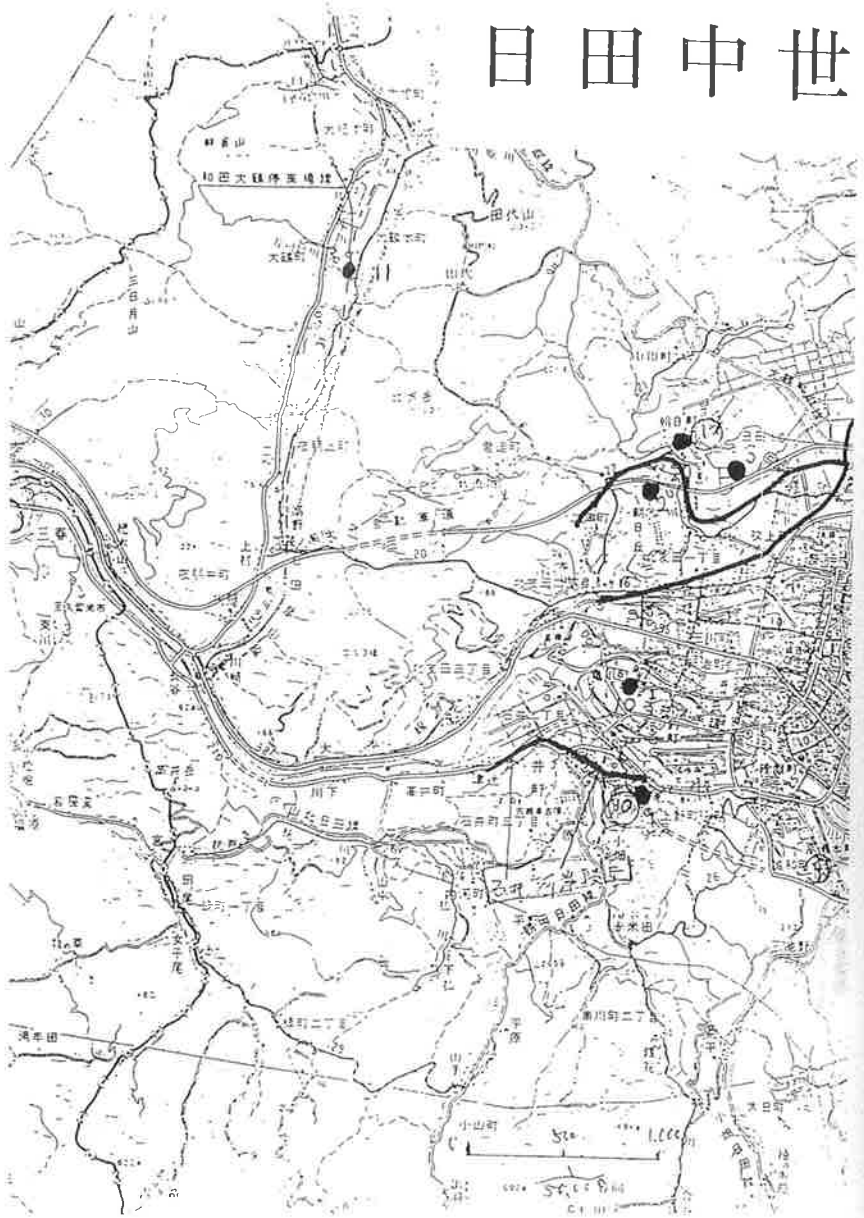
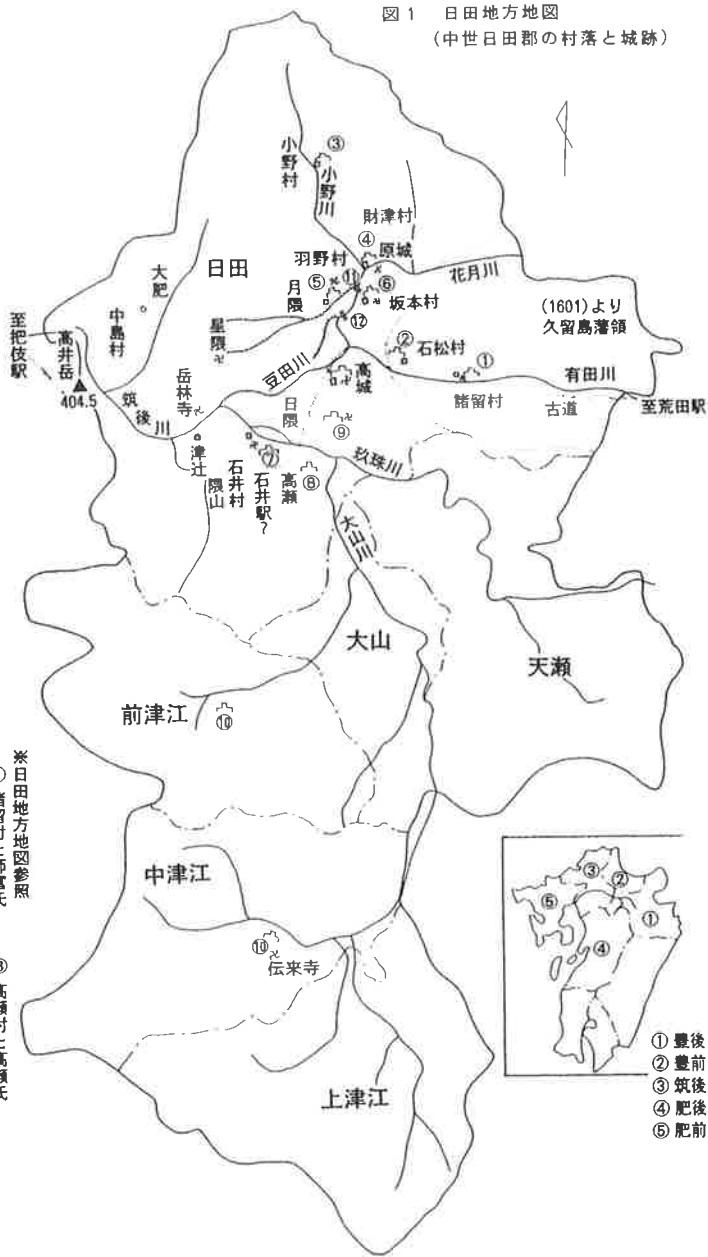


図1 日田地方地図
(中世日田郡の村落と城跡)



※日田地方地図参照

- ① 諸留村と師富氏
- ② 石松村と石松氏
- ③ 小野村と佐藤氏
- ④ 財津村と財津氏
- ⑤ 羽野村と羽野氏
- ⑥ 坂本村と坂本氏
- ⑦ 石井村と坂本分家
- ⑧ 高瀬村と高瀬氏
- ⑨ 堤村と堤氏
- ⑩ 津江方面と津江、長谷部氏
- 丸城跡 卍氏寺跡 □居館跡
- 中井堰 幸水路
- ⑪ 風呂元井堰
- ⑫ 豊永井堰



- ① 豊後
- ② 豊前
- ③ 筑後
- ④ 肥後
- ⑤ 肥前

◇領主制村落

各種の歴史資料から、中世領主制村落の輪郭が判明する。

武士団の所有土地、屋敷地、田畠の面積は検地の記録から知ることが出来る。田地には灌漑水路が付いている。坂本備中入道の場合を見よう。

田地 百三十九町五反余は、その居館のある大字坂本を流れる花月川から、水田灌漑のため「風呂元水路」が西方に長く伸びている。その南側の「髪永水路」（図は略）で、所領の田地を潤している。その広い一帯の、山あいや麓に農家が点在する。小集落が各処にある。その境には猿田彦などの石造物が、立っていることもある。大体その範囲が、中世村落領主の村と考えたいものである。

その村内には必ずあったと云える神社（氏神）があり、領主が祭事を司り、春の田植え祭りの前には、水路の補修の指示をなす。農民は耕作を行うが、農地の所有者は領主である。農民は家畜と、農具全てを所有し、家居も自分のものである。農民は居住の自由権があり領主との争いで、他地方に移動も出来た。

領主は裁判権を持っていた。坂本家の所領地内に「刑場跡」の私称地名が二ヶ所残っている。山の方と、現在の集落地の中央から少し離れた畑の中で、近くに誰も家を建てる人がいない。また村役人の任命は領主が行った。

領主は国主に対し、軍役の責任がある。日田の場合、大友家の命で、郎従、下人、武具係、食糧係などで数名以上を率いて戦場に向かうのである。文禄の役では大友軍として、朝鮮半島まで出征した。

中世の村落は、近世徳川期の農村とはその構造が大いに異なるのである。この頃から農業は二毛作が普及し、農耕技術も進み肥料の使用、谷川の奥に堤を設け貯水池とした。半壊の跡を見ることが出来る。食餌は二食で、衣類は高級品は絹、一般は紙の布（木楮、三極）で勿論洗濯も出来、丈夫で温かい。木綿（近世から）に似ている。村落には農民のみでなく、職能民もいた

形跡が昭和初期まで発見出来た。

領主は度々会合し、連歌を楽しんだ。天文十七年十二月二十一日高瀬山城守鑑俊兄弟は近くの坂本因幡守の宅で連歌の会を催した(豊西記)

◇おわりに

中世日田の武士団―その氏名の大部分は判明した。貴重な歴史上の一級資料が残り、その主要の人物の居住地も確実に残っているのは嬉しい限りである。勿論その末裔も日田の各処に健在で、江戸期に地区外に出た人々もいる。

これらの中世遺跡、遺物から日田の中世景観をまだまだ解明することは可能である。今回は氏名は別にして、概説程度にし、村落も地図に示す通り、多数の拠点が判明して居るが、例として坂本氏のみにとどめた。まだまだ中世の遺物、遺跡は多い。多くの方々による今後の研究に期待したい。

参考資料

- 「豊後国諸侍着到」芥川龍男教授(法制大)が大分県地方史第一〇八号で紹介したもので、同誌に詳しく出ている。日田市光岡に在住する旧家の武内俊雄氏所蔵
- 天正十七年検地は豊西記にあるもの
- 大蔵和氏は日田市隈町。大蔵永常の系統を引き、郷土史家として信頼の出来る方であった。
- 総合村落史考―日田の歴史研究―長順一郎
- 国立歴史民俗博物館 研究報告 第六九集
- 日本社会の歴史(中) 編野善彦

- 日田記 芥川龍男・財津永延
- 中世後期の村落 伊藤正敏
- 日本農業技術史 古島敏雄
- 中世の風景を読む―7― 網野善彦・石井進

(日田市石井町の二二一)